

2014年11月14日、札幌市で「地域愛とソーシャル・キャピタル」をテーマとしたシンポジウムを日本計画行政学会北海道支部研究会が開催しました。

パネラーとして北海道総合政策部地域づくり支援局集落対策・地域活力グループ主幹の西田潤さんが北海道が取り組んでいる集落対策と昨年からのモデル的に占冠村（占冠・中央・双珠別地区）、幌加内町（母子里地区）、深川市（納内地区）の3カ所で行った取り組みを報告の後、（一財）北海道開発協会を進めている北海道ソーシャル・キャピタル研究会座長梶井祥子札幌大谷大学教授が「人と地域のつながり調査」について、研究会委員の佐藤郁夫札幌大学教授が「札幌一極集中と地域社会」について報告しました。続いて、研究会委員吉地望武蔵女子短期大学教授をコーディネーターとして討論が行われました。

話題提供 1

人と地域のつながり調査



梶井 祥子 氏
札幌大谷大学社会学部
地域社会学科教授

北海道ソーシャル・キャピタル研究会でこれまでにに行った「人と地域のつながり」に関する2回のアンケート調査の概要を報告します。1回目は2010年に「道内各地のひとと地域のつながりに関するアンケート調査」を道内9地域で、2回目は13年を対象を若年層に絞って道内11校の高校にアンケート調査をしました。現在、高校生のアンケート調査は分析とヒアリング調査を継続中ですが、それらにもとづいてご紹介します。

この2回の調査は、経済的効果以外の何かの人々の精神的豊かさと幸福感に影響を与えており、地域で生きていくうえでのプライドとなっていて、そこにソ-

シャル・キャピタル（以下SC）がかかわっているのではないかと、という仮定のもとで始められました。

SCは学際的にさまざまな調査が実証的に行われていますが、その多くはうまくいっている地域にどんなSCがあって、どう結果に結びついているのかという調査です。しかし、私たちの調査はいろいろな地域に潜在していて、いずれSCに発展しそうな「まだ、火はともっていないが、くすぶっているオキのようなもの」を探し出すという非常に難しいものでした。

調査結果の分析

例えば、「地域への愛着」があることと、そこに「住み続けたい」と思うことにはどのような関連があるのでしょうか。潜在的なSCを探るためには必要な分析事項です。高齢者が多い地域では、地域への愛着と住み続けることの志向性はほぼ一致した結果になりました。働き盛りの中高年や若年層の回答が多かった地域では、愛着のある人がそのまま住み続けたいという結果には必ずしもなっていません。「地域への愛着」は、全国調査では一般的に「愛着がある」が70～80%台で落ち着きますが、今回の調査結果を年齢別に整理すると、「若者」「子育て世代」「働き盛り」の年代で数値が低く、だんだんと地域への愛着が下がっているようにもみえます。これが、＜地域の将来への期待値＞とするならば、潜在的SCの収縮が懸念されるどころです。

住んでいる地域で、「特に気に入っているもの」を尋ねると、地方の人たちは「自然環境」に価値を置いていることがよく分かります。実施中のヒアリング調査でも、地方の高校生からは「自然が気に入っている」と「食の安全」という回答が出てきました。価値あるものを、さらに地域独自のブランドとして育てていく仕掛けがSCの醸成とかわってきそうです。

第1回調査は、各地域のサンプル数が100～200で、

※1 ソーシャル・キャピタル
社会的なつながり（ネットワーク）とそこから生まれる規範・信頼。共通の目的に向けて効果的に協同行動へと導く社会組織の特徴。

傾向を読み取る程度の予備的調査として位置付けています。各地域の「中間集団」に着目して、調査対象となった方々が地域のどこにかかわりを持っているのかをレーダーチャート（下図参照）にしてみました。自治体Aでは祭礼関係が非常に突出していることが分かりますが、この地域には寺社仏閣数が多く、そのつながりが強いことが予想されます。「愛着」があっても、「住み続けたくない」という回答が多かった自治体Bに関しては、レーダーチャートからも既成の中間集団とのつながりが希薄であるように読み取れます。

このように、レーダーチャートによって示された「中間集団」との関わり方については、その地域の特性や交流活性化のためのヒントに成り得るデータとして使えるのではないのでしょうか。

若者を対象とした調査

実施中の高校生を対象にした調査の一部を紹介します。「地域で気に入っていること」では、「豊かな自然」「家族親戚がいること」「友人がいること」の支持が高くなっています。そして、「お祭りなどの行事」と回答している方も1割ほどいるので、社会教育の視点を再評価してもよいと思います。

どの高校でも「地域への愛着度」は高く、全体の80.4%が「感じる」と答えていて、若者が地域に愛着を持っていることが分かります。「地域の行事への参加」

については7割ほどが参加していました。今後、ヒアリング調査を終えてから、このデータを地域ごとにどう比較するのか検討していきたいと考えています。

この高校生たちが働き盛りになる約20年後に向けて、現在どのようなキャリアデザインを持っているのかを直接尋ねてみました。自分が40歳になった時には、「地元に戻っていたい」と答えた生徒が予想外に多くいささか驚きました。都会への憧れについても「特に感じない」という声が優勢でした。「地元が好き」という生徒たちに「地元とは何か」を聞いたところ、多くが「人と人のつながり」と答えています。

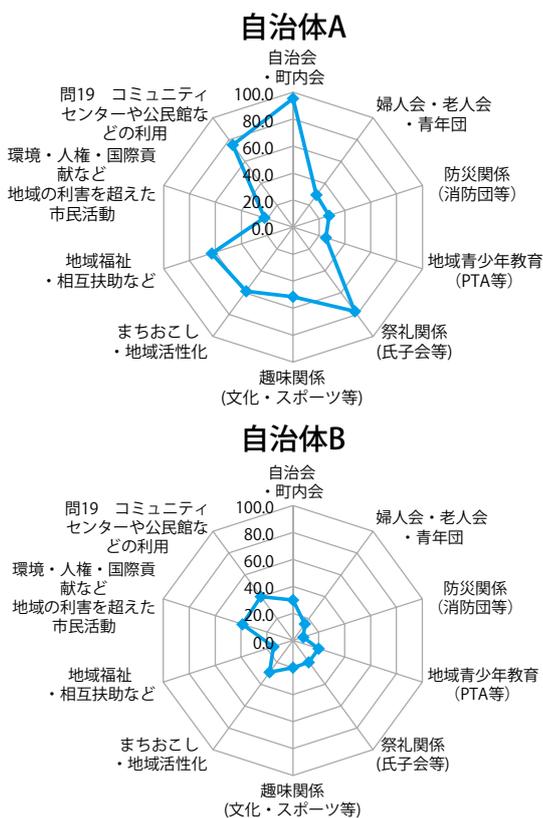
この調査を通じて若い人たちに何が必要なのか分析できれば、人口減少社会の歯止めの手掛かりになるのではないかと考えています。

「地域愛とソーシャル・キャピタル」の醸成について考えるのなら、若年層の意識を取り込んだ地域の未来図を新たに描き直して示していただきたいというのが、自治体に期待することです。それを地域のコミュニティの再興や地域参加を促進するような中間集団をどう育むかのヒントにしていきたいと思います。

社会教育の分野

地域にとっては、家族や町内会の結びつきのように、同質的につながっている結合型（ボンディング型）のSCと、共同体以外の異質な人々を結びつける橋渡し型（ブリッジング型）のSC、これら双方のメリットを活かしたコンビネーション型SCが有効になります。また、最近注目されている連結型^{※2}という考え方もあります。高校生の調査と併せて、さまざまなタイプのSCが地域にどのように取り込まれているのかも考えていきたいと思っています。

パットナム^{※3}は、「これからは市民的発明の時代だ」と言っています。草の根的なコミュニティの醸成に地域独自の工夫を期待したいところです。また、ボーイスカウトやガールスカウト活動のような社会教育への投資は、将来のSC醸成のために有効だと評価されています。地域の大人が社会教育的な視点を持つことも重要だと、高校生調査をしながら改めて感じました。



※2 連結型（リンキング・ソーシャル・キャピタル）
 権力、社会的地位や富に対するアクセスが異なる社会階層の個人や団体をつなぐ関係。例えば、コミュニティの範囲を超えて、公的機関から資源や情報を活用する能力であるとされる。
 ※3 パットナム（Robert putnam）
 アメリカの政治学者。1993年に出版した書物の中でSCの概念、特徴について論じた。

話題提供 2

札幌一極集中と地域社会の課題

1990年代に北海道の人口の札幌一極集中が問題になりましたが、北海道の人口流出を食い止めるダム機能を持った人口195万人の札幌市といえどもその機能が低下し始めています。日本の三大都市圏に2000年頃から人々が集まるようになり、今では人口の半分以上が集まっています、日本全体から見るとこの三大都市圏に対抗するには札幌市でも力不足で例外的な地域として捉えることはできなくなっています。

札幌市では空き家も増えていて14%ほどになっています。その多くは賃貸住宅で、昔のマーケットを想定した考え方が通用しなくなっていることが分かりますし、高齢化と交通の利便性の悪さも影響しているようです。

経済構造の画一化が続く札幌

札幌市では91年に事業所数がピークを迎え、その後減少していますが、情報・医療・社会嗜好の変化に対応した、環境や雇用に関連した産業は大きくなっていて、就業者は増えています。

札幌に一極集中した原因の一つには、経済構造の画一化があるので、この産業に就業者が占められていることへの対応策として、多様性や文化、社会を利用した産業育成を考えていかなければならないと思います。

私は、SCのボンディング型とブリッジング型の両方のハイブリッド型がマーケットの拡大に役立つと思っています。

日本の中で、ボンディング型で代表的な地域は沖縄です。観光の研究での調査では、北海道への旅行者の5%は帰省客ですが、沖縄の帰省客は10%でした。沖縄のお祭りでは、住んでいる人以上に参加する人であふれています。共同体的な人のつながりが多く、大事なお祭りには東京や大阪などの大都市にいても参加することが、帰省客の多さにつながっているのです。この共同体的な良い面だけを北海道の札幌に取り入れる



佐藤 郁夫 氏
札幌大学経営学部教授

方法を考えることは大切なことです。

なぜ、共同体やSCが注目されるのかは、グラノヴェッター^{※4}の転職にかかわるネットワーク（人とのつながり）が有名な事例としてあります。そこでは「弱い紐帯の強み^{うすうたい}」といわれていて、転職に役立つのは、付き合いの薄い人だということです。それは、人間関係の深い人とは発想方法が近く、付き合いも密接なので自分の可能性（マーケット）を拡大するのに役立たないということです。沖縄的な共同体（お祭り）を利用した帰省客の増加と「弱い紐帯の強み」の両方を利用したハイブリッド型をつくることができれば、マーケットの拡大に役立ちます。また、例えば、企業誘致に障害がある場合には、ある程度人脈的なつながりが深い方が有利となるように、スイッチングコスト^{※5}が高いことにはボンディング型が有利に働きます。マーケットを拡大する時にどちらのSCが有利に働くのかに関しては、そこにかかわる人をうまく活用する方法を考えることが必要です。

これからの地域のヒント「群言堂^{ぐんげんどう}」^{※6}

石見銀山の群言堂^{いわみ}はこれからの地域を考える上で非常にヒントになります。地域おこし協力隊^{※7}や群言堂は、そこに住みたいから行動するので、その人たちにとってやり易いようにインフラを整えることが大切です。地域には最低限、「病院」と「コンビニ」「Wi-Fiのような情報環境」が必要です。それらなしに地域起こし協力隊に住み続けてもらうことは難しいので、政策的な工夫をすることが大事なポイントです。

また、これから先、人口が減って余る土地の利用の仕方もある大きなポイントで、その方法を間違えると取り返しがつかなくなります。これからのビジネスモデルや地域のモデルでは、集住も含めた土地の利用は大事な要素となります。



※6 群言堂

石見銀山に嫁いだ女性が、寂れた商店街が好きになり、空き店舗を活用して開店したブティック。全国に直営店がある。

※7 地域おこし協力隊

地域おこし活動の支援や農林漁業の応援、住民の生活支援など「地域協力活動」に従事し、あわせてその定住・定着を図りながら、地域の活性化に貢献するもの。

※4 グラノヴェッター (Mark Granovetter)

アメリカの社会学者。SCのうちネットワークに注目。弱いつながりは異質で新しい情報へのアクセスを促進し、社会的に価値があることを示した。

※5 スイッチングコスト

変更手続きのための費用、心理的負担。

全体討論

地域愛とソーシャル・キャピタル



吉地 望氏
武蔵女子短期大学経済
学科教授

吉地 今回のシンポジウムは、北海道開発協会が出版した「これからの選択 ソーシャル・キャピタル—地域に住むプライド—」の著者、小林好宏先生の問題意識がテーマとなっています。

社会関係資本のSCの概念については非常にたくさんの議論がされていますが、今日は市場主義の原理とは違う生活優先・社会優先で人々がつながってそこに住むという部分に重点を置いて考えます。そこに住むことは、幸福をどう考えるかと深くかかわっていますので、「幸福感と人とのつながり」についてお考えをお聞かせください。

西田 3地区の住民意識調査で、住み続けたい意思が一番強かったのは、幌加内町の母子里で34人の集落の多くが年金生活という状況の中で、働く方を含めた80%以上ができる限り住み続けたいとのことでした。理由を聞き取り調査したところ、住民の半分に何らかの親戚のつながりがありました。家庭菜園で採れたものをご近所に配って物々交換しながら、皆さんがお金をかけずに暮している。他の2地区と比べて、幸せ満足度がとても高かったことから、地域では人のつながりが大事だと改めて思いました。

梶井 幸福感が高い、生活満足度が高いと思う人たちには、家族基盤の強い人が多いことはどの調査結果でも出ています。しかし、どの地域にも幸福でない、地域に愛着を持たない方が20%前後います。考えるべきは、その人たちにどう幸福感を持ってもらうかで、そのことが地域に残る気持ちにつながります。

若者はルートを外れると復活できないのではないかとおびえています。失敗しても転落しないSCを地域デザインで見せることは安心感につながります。幸福感を持たない人たちにも安心できるSCを示せられれば地域に住み続けたいと思ってくれると考えます。

佐藤 学生にコーヒーをコンビニで買う理由を尋ねたところ、「友達が良いと言っているから」という答えがありました。今のように物があふれている時代では、

物よりも人の信頼（人間関係）が価値を持ち、人とのつながりをより重視する傾向になっています。その傾向は大都市でより求められていることが、SCが注目される要因だと思います。

吉地 家族基盤の強い地域では幸福感が高いことから、そうではないところにどうアプローチするかが政策的に明確になったと思います。

地域に愛着があってもその地域に住まない人たちがいますが、そのこととSCの関係性は何かありますか。

梶井 愛着の概念はすごく曖昧あいまいで難しく、地域に愛着を感じるかにはさまざまな要素が絡みます。道北では、「地元は好きだけれど、地域に愛着はない」と答えた高校生がいました。他の地域の高校生も、「地元」は友達や先生、家族など人とのつながりを指していて、「地域」とは居住地を基盤とした基礎自治体・物理的空間を示している場合が多く、それぞれに使い分けられていることがわかりました。地元の人々とのつながりを大事にしながらも、目に見えて衰退していく地域に不安を感じている高校生もいました。

人口減少の危機感あせを煽りすぎると、今は「住み続けたい」と思っている若者たちも、徐々に地域への愛着を減退させるかもしれません。地域への愛着を、まず大人の側が示して、さまざまな行事や仕掛けを企ててほしい。大人が地域参画していかなければ、若い人は地域に残りようがないと思います。

吉地 愛着という言葉について、子どもたちは地域と人とのかわりを分けて理解していて、愛着は土地のことだと思っていることがよくわかりました。

地域の課題は大きく分けると地域経済の再生と地域コミュニティの再生です。今回は、地域コミュニティの再生にSCが非常に重要だということを議論しました。選択肢が増えた現代社会で、人々は物よりも人とのつながりに新しい価値を見出しつつあることと、時代背景として社会関係資本が重要で、年長者が範を示すことも非常に重要であるとのお話があり、若者が地域志向になるためには、金銭以外のインセンティブ（動機付け）として新しい価値観を導入する必要があるという提案に、特に注目していきたいと思います。